

種山ヶ原

宮沢賢治

青空文庫

種^{たね}山^{やま}ケ原^{はら}といふのは北^{きた}上^{かみ}山地のまん中の高原で、青黒いつ

るつるの蛇紋岩^{じやもんがん}や、硬い橄欖岩^{かんらんがん}からできてゐます。

高原のへりから、四方に出たいくつかの谷の底には、ほんの五六軒づつの部落があります。

春になると、北上の河谷^{かこく}のあちこちから、沢山の馬が連れて来られて、此^この部落の人たちに預けられます。そして、上の野原に放されます。それも八月の末には、みんなめいめいの持主に戻つてしまふのです。なぜなら、九月には、もう原の草が枯れはじめ水霜が下りるのです。

放牧される四月^{よつき}の間も、半分ぐらゐまでは原は霧や雲に鎖^{とざ}され

ます。実にこの高原の続きこそは、東の海の側からと、西の方からとの風や湿気しつきのお定まりのぶつつかり場所でしたから、雲や雨や雷や霧は、いつでももうすぐ起つて来るのでした。それですから、北上川の岸からこの高原の方へ行く旅人は、高原に近づくに従つて、だんだんあちこちに雷神の碑を見るやうになります。その旅人と云つても、馬を扱ふ人の外ほかは、薬屋か林務官、化石を探す学生、測量師など、ほんの僅わづかなものでした。

今年も、もう空に、透き徹とほつた秋の粉が一面散り渡るやうになりました。

雲がちぎれ、風が吹き、夏の休みももう明日だけです。

達二は、明後日から、また自分で作った小さな草鞋わらぢをはいて、

二つの谷を越えて、学校へ行くのです。

宿題もみんな済ましたし、蟹かにを捕ることも木炭すみを焼く遊びも、もうみんな厭あきてゐました。達二は、家の前の檜ひのきによりかかつて、考へました。

(あゝ。此の夏休み中で、一番面白かったのは、おぢいさんと一緒に上の原へ仔馬を連れに行つたのと、もう一つはどうしても剣けん舞まひだ。鶏の黒い尾を飾つた頭巾づきんをかぶり、あの昔からの赤い陣羽織を着た。それから硬い板を入れた袴はかまをはき、脚絆きやはんや草鞋ちやうちんをきりつとむすんで、種山剣舞連と大きく書いた沢山の提灯ちやうちんに囲まれて、みんなと町へ踊りに行つたのだ。ダー、ダー、ダースコ、ダー、ダー。踊つたぞ、踊つたぞ。町のまっ赤な門火の中で、

刀をぎらぎらやらかしたんだ。櫓夫ならをさんと一緒になった時などは、
刀がほんたうにカチカチぶつつかった位だ。

ホウ、そら、やれ、

むかし 達谷たつこくの 悪路王あくろわう、

まつくらあくらの二里ほらの洞、

渡るは 夢と 黒夜神こくやじん、

首は刻まれ 朱桶しゆをけに埋もれ。

やったぞ。やったぞ。ダー、ダー、ダースコ、ダーダ、

青い 仮面めんこの こけおどし、

太刀たちを 浴びては いっぱかぶ、

夜風の 底の 蜘蛛くもをどり、

胃袋う はいて ぎったりぎたり。

ほう。まるで、……。）

「達二。居るが。達二。」達二のお母さんが家の中で呼びました。
「あん、居る。」達二は走って行きました。

「善い童^{わらす}だはんてな、おぢいさんと、兄^あなど、上の原のすぐ上り口で、草刈^わつてるがら、弁当持^こって行^こつて来^こ。な。それがら牛も連れてつて、草食^かあせで来^こ。な。兄ながら離^はれなよ。」

「あん、行^いて来る。行^いて来る。今草鞋穿^{わらぢは}ぐがら。」達二ははねあがりました。

お母さんは、曲^まげ物の二つの櫃^{ひつ}と、達二の小さな弁当とをいくつか紙にくるんで、それをみんな一緒に大きな布の風呂敷^{ふろしき}に包み

込みました。そして、達二が支度をして包みを背負つてゐる間に、おつかさんは牛をうまやから追ひ出しました。

「そだら行つて来ら。」と達二は牛を受け取つて云ひました。

「氣い付けで行げ。上で兄あいながら離れなよ。」

「あん。」達二は、垣根のそばから、楊やなぎの枝を一本折り、青い皮をくるくる剥はいで鞭むちを拵こしらへ、静に牛を追ひながら、上の原への路みちをだんだんのぼつて行きました。

「ダーダー、スコ、ダーダー。」

夜の頭巾づきんは 鶏とりの黒尾、

月のあかりは……………、

しつ、歩け、しつ。」

日がカンカン照ってるました。それでもどこかその光に青い油の疲れたやうなものがありましたし、又、時々、冷たい風が紐ひものやうにどこからか流れては来ましたが、まだ仲々暑いのでした。牛が度々立ち止まるので、達二は少し苛いら々しました。

「上さ行つて好い草食へ。早く歩けつ。しつ。馬鹿ばかだな。しつ。」けれども牛は、美しい草を見る度に、頭を下げ、舌をべらりと廻して喰べました。

（牛の肉の中で一番上等が此この舌だといふのは可笑をかしい。涎よだれで粘ねばねば々してる。おまけに黒い斑ぶちぶち々がある。歩け。こら。）

「歩け。しつ。歩け。」

空に少しばかりの、白い雲が出ました。そして、もう大分のぼ

つてゐました。谷の部落がずっと下に見え、達二の家の木小屋の屋根が白く光つてゐます。

路が林の中に入り、達二はあの綺麗な泉まで来ました。まっ白の石灰岩から、ごぼごぼ冷たい水を噴き出すあの泉です。達二は汗を拭いて、しゃがんで何べんも水を掬つてのみました。

牛は泉を飲まないで、却つて苔こけの中のたまり水を、ピチャピチャ嘗なめました。

達二が牛と、又あるきはじめたとき、泉が何かを知らせる様に、ぐうつと鳴り、牛も低くうなりました。

「雨になるかも知れないな。」と達二は空を見て眩つぶやきました。林の裾すその灌くわんぼく木の間を行ったり、岩いはかけ片の小さく崩れる所を

何べんも通つたりして、達二はもう原の入口に近くなりました。

光つたり陰つたり、幾重にも畳む丘の向ふに、北上の野原が夢のやうに碧くまばゆく湛へてゐます。河が、春日大明神の帶のやうに、きらきら銀色に輝いて流れました。

そして達二は、牛と、原の入口に着きました。大きな櫓の木の下に、兄さんの縄で編んだ袋が投げ出され、沢山の草たばがあちこちにころがってゐました。

二匹の馬は、達二を見て、鼻をふるふる鳴りました。

「兄な。居るが。兄な。来たぞ。」達二は汗を拭ひながら叫びました。

「おゝい。あゝい。其処に居ろ。今行くぞ。」

ずうつと向ふの窪^{くぼ}みで、達二の兄さんの声がしました。牛は沢山の草を見ても、格別嬉^{うれ}しさうにもしませんでした。

陽^ひがぱつと明るくなり、兄さんがそっちの草の中から笑つて出て来ました。

「善^ゆぐ来たな。牛も連れで来たのが。弁当持^もつてが。善^ゆぐ来た。今日^{ひる}あ午まがらきつと曇^{おら}る。俺^{おら}もう少し草集めて仕舞^{しむ}がらな、此^こ処^こらに居^ゐろ。おぢいさん、今来る。」

兄さんは向ふへ行かうとして、振り向いて又云ひました。

「腹減^{ふろしき}つたら、弁当、先に喰^くべてろ。風呂敷^{ふろしき}ば、あの馬さ結付けで置^おげ。午まになつたら又来るがら。」

「うん。此処^こに居^ゐる。」

そして達二の兄さんは、行つてしまひました。空にはうすい雲がすっかりかゝり、太陽は白い鏡のやうになつて、雲と反対に馳はせました。風が出て来て刈られない草は一面に波を立てます。

どうしたのか、牛が俄にはかに北の方へ馳せ出しました。達二はびつくりして、一生懸命追ひかけながら、兄の方に振り向いて叫びました。

「牛あ逃げる。牛あ逃げる。兄あいな。牛あ逃げる。」

せいの高い草を分けて、どんどん牛が走りました。達二はどこ迄までも夢中で追ひかけました。そのうちに、足が何だか硬張こはばつて来て、自分で走つてゐるのかどうか判わからなくなつてしまひました。それからまはりがまっ蒼さをになつて、ぐるぐる廻り、たうとう達二

は、深い草の中に倒れてしまひました。牛の白い斑が終りにちらつと見えしました。

達二は、仰向けになつて空を見ました。空がまっ白に光つて、ぐるぐる廻り、そのこちらを薄い鼠色ねずみの雲が、速く速く走つてゐます。そしてカンカン鳴つてゐます。

達二はやつと起き上つて、せかせか息しながら、牛の行つた方に歩き出しました。草の中には、牛が通つた痕あとらしく、かすかな路のやうなものがありません。達二は笑ひました。そして、（ふん。なあに、何処どこかで、のっこり立つてるさ。）と思ひました。

そこで達二は、一生懸命それを跡つけて行きました。ところがそ

の路のやうなものは、まだ百歩も行かないうちに、をとこへしや、すてきに背高の薊あざみの中で、二つにも三つにも分れてしまつて、どれがどれやら一向わからなくなつてしまひました。達二は思ひ切つて、そのまん中のを進みました。けれどもそれも、時々断きれたり、牛の歩かないやうな急な所を横よこぎ様に過ぎたりするのでした。それでも達二は、

（なあに、向ふの方の草の中で、牛はこつち向いて、だまつて立つてるさ。）と思ひながら、ずんずん進んで行きました。

空はたいへん暗く重くなり、まはりがぼうつと霞かすんで来ました。冷たい風が、草を渡りはじめ、もう雲や霧が、切れ切れになつて眼めの前をぐんぐん通り過ぎて行きました。

（あゝ、こいつは悪くなつて来た。みんな悪いことはこれから集^{たか}つてやつて来るのだ。）と達二は思ひました。全くその通り、^{にはか}俄に牛の通つた痕は、草の中で無くなつてしまひました。

（あゝ、悪くなつた、悪くなつた。）達二は胸をどきどきさせました。

草がからだを曲げて、パチパチ云つたり、さらさら鳴つたりしました。霧が殊に^{しげ}滋くなつて、着物はすっかりしめつてしまひました。

達二は咽喉^{のど}一杯叫びました。

「兄^{あい}な。兄な。牛あ逃げだ。兄な。兄な。」

何の返事も聞えません。黒板から降る白墨の粉のやうな、暗い

冷たい霧の粒が、そこら一面踊りまはり、あたりが俄にシインとして、陰気に陰気になりました。草からは、もう雫の音がポタリポタリと聞えて来ます。

達二は早く、おぢいさんの所へ戻らうとして急いで引返しました。けれどもどうも、それは前に来た所とは違つてゐたやうでした。第一、薊が^{あざみ}あんまり沢山ありましたし、それに草の底にさつき無かつた岩かけが、度々ころがつてゐました。そしてたうとう聞いたこともない大きな谷が、いきなり眼の前に現はれました。すゝきが、ざわざわざわつと鳴り、向ふの方は底知れずの谷のやうに、霧の中に消えてゐるではありませんか。

風が来ると、芒の穂は細い沢山の手を一ぱいのぼして、忙しく^{せは}

振って、

「あ、西さん、あ、東さん。あ西さん。あ南さん。あ、西さん。」
なんて云ってゐる様でした。

達二はあんまり見つともなかったので、目を瞑^{つぶ}つて横を向き
ました。そして急いで引つ返しました。小さな黒い道が、いきなり
草の中に出て来ました。それは沢山の馬の蹄^{ひづめ}の痕で出来上つてゐ
たのです。達二は、夢中で、短い笑ひ声をあげて、その道をぐん
ぐん歩きました。

けれども、たよりのないことは、みちのはゞが五寸ぐらゐにな
ったり、又三尺ぐらゐに変わったり、おまけに何だかぐるつと廻つ
てゐるやうに思はれました。そして、たうとう、大きinateつぺん

の焼けた栗くりの木の前まで来た時、ぼんやり幾つにも岐わかれてしまひました。

其処そこは多分は、野馬の集まり場所であつたでせう、霧の中に円い広場のやうに見えたのです。

達二はがっかりして、黒い道を又戻りはじめました。知らない草穂くさぼが静かにゆらぎ、少し強い風が来る時は、どこかで何かが合図をしてでも居るやうに、一面の草が、それ来たつとみなからだを伏せて避けました。

空が光つてキインキインと鳴つてゐます。それからすぐ眼の前の霧の中に、家の形の大きな黒いものがあらはれました。達二はしばらく自分の眼を疑つて立ちどまつてゐましたが、やはりどう

しても家らしかったので、こはこはもつと近寄つて見ますと、それは冷たい大きな黒い岩でした。

空がくるくるくると白く揺らぎ、草がバラツと一度に雫を払ひました。

（間違つて原を向ふ側へ下りれば、もうおらは死ぬばかりだ）と達二は、半分思ふ様に半分つぶやくやうにしました。それから叫びました。

「兄^{あい}な、兄な、居るが。兄な。」

又明るくなりました。草がみな一斉に悦^{よろこ}びの息をします。

「伊佐戸^{いさど}の町の、電気工夫^{わらす}の童あ、山男に手足い縛らへてたふうだ。」といつか誰^{たれ}かの話した語^{ことば}が、はつきり耳に聞えて来ます。

そして、黒い路が、俄にはかに消えてしまひました。あたりがほんのしばらくしいんとなりました。それから非常に強い風が吹いて来ました。

空が旗のやうにぱたぱた光つて翻へり、火花がパチパチパチツと燃えました。

達二はいつか、草に倒れてゐました。

そんなことはみんなぼんやりしたもやの中の出来事のやうでした。牛が逃げたなんて、やはり夢だかなんだかわかりませんでした。風だつて一体吹いてゐたのでせうか。

達二はみんなと一緒に、たそがれの県道を歩いてゐたのです。
橙だいたい色の月が、来た方の山からしづかに登りました。伊佐戸の町

で燃す火が、赤くゆらいでゐます。

「さあ、みんな支度はいゝが。」誰かが叫びました。

達二はすっかり太い白いたすきを掛けてしまつて、地面をどんどん踏みました。櫓夫なをさんが空に向つて叫んだのでした。

「ダー、ダー、ダー、ダー、ダースコダーダー。」それから、大人が太鼓を撃ちました。

達二は刀を抜いてはね上りました。

「ダー、ダー、ダー、ダー。ダー、スコ、ダーダー。」

「危ない。誰だ、刀抜いだのは。まだ町さも来ないに早あぢや。」

怪物の青仮面あをめんをかぶつた清介せいすけが威張つて叫んでゐます。赤い提ち灯やうちん

灯が沢山点ともされ、達二の兄さんが提灯を持って来て達二と並

んで歩きました。兄さんの足が、寒天のやうで、夢のやうな色で、
無暗に長いのでした。^{むやみ}

「ダー、ダー、ダー、ダー。ダー、スコ、ダーダー。」

町はづれの町長のうちでは、まだ門火を燃して居ませんでした。
その水松樹の垣に囲まれた、暗い庭さきにみんな這入^{はひ}って行きま
した。

小さな奇麗な子供らが出て来て、笑って見ました。いよいよ大
人が本気にやり出したのです。

「ホウ、そら、遣^やれ。ダー、ダー、ダー、ダー。ダー、スコ、ダ
ーダー。」「ドドーン ドドーン。」

「夜風さかまき ひのきはみだれ、

月は射そぐ 銀の矢なみ、

打うつも果てるも 一つのいのち、

太刀たあちの軋きしりの 消えぬひま。ホツ、ホ、ホツ、ホウ。」

刀が青くぎらぎら光りました。梨なしの木の葉が月光にせはしく動いてゐます。

「ダー、ダー、スコ、ダーダー、ド、ドーン、ド、ドーン。太刀はいなづま すゝきのさやぎ、燃えて……」

組は二つに分れ、劔がカチカチ云ひます。青仮面あをめんが出て来て、

溺いつぶかつぶ死する時のやうな格好かくかうで一生懸命跳ね廻ります。子供ら

が泣き出しました。達二は笑ひました。

月が俄にはかに意地悪い片眼になりました。それから銀の盃さかづきのやう

に白くなって、消えてしまひました。

（先生の声がする。さうだ。もう学校が始まつてゐるのだ。）と達二は思ひました。

そこは教室でした。先生が何だか少し瘠やせたやうです。

「みなさん。楽しい夏の休みももう過ぎました。これから気持ちのいゝ秋です。一年中、一番、勉強にいゝ時です。みなさんはあしたから、又しっかり勉強をするのです。どなたも宿題はして来たでせうね。今日持つて来た方は手をあげて。」

達二と櫛夫なつをさんと、たった二人でした。

「明日は忘れないでみなさん持つて来るのですよ。もし、ぜんたい、してしまはなかつた人があつても、やはりその儘まま持つて来

るのです。すっかりしてしまはなかった人は手をあげて。」

誰も上げません。

「さうです。皆さんは立派な生徒です。休み中、みなさんは何をしましたか。そのうちで一番面白かったことは何ですか。達二さん。」

「おぢいさんと仔馬を集めに行つたときです。」

「よろしい。大へん結構です。櫓夫さん。あなたはお休みの間に、何が一番楽しかったのですか。」

「剣舞けんばひです。」

「剣舞をあなたは踊つたのですか。」

「さうです。」

「どこですか。」

「伊佐戸いさどやあちこちです。」

「さうですか。まあよろしい。お座りなさい。みなさん。外にも剣舞に出た人はありますか。」

「先生、私も出ました。」

「先生、私も出ました。」

「達二さんも、さうですか。よろしい。みなさん。剣舞は決して悪いことではありません。けれども、勿論もちろんみなさんの中にそんな方はないでせうが、それでお銭あしを貰もらつたりしてはなりません。みなさんは、立派な生徒ですから。」

「先生。私はお銭を貰ひません。」

「よろしい。さうです。それから……。」

達二は、眼を開きました。みんな夢でした。冷たい霧や雪が額に落ちました。空は霧で一杯で、なんにも見えません。俄かに明るくなったり暗くなったりします。一本のつりがねさうが、身体を屈めて、達二をいたはりました。

そして達二は又うとうとしました。そこで霧が生なまぬる温い湯のやうになったのです。可愛い女の子が達二を呼びました。

「おいでなさい。いゝものをあげませう。そら。干した苹果りんごですよ。」

「ありがど、あなたはどなた。」

「わたし誰でもないわ。一緒に向ふへ行つて遊びませう。あなた

驢馬ろばを有もつてゐて。」

「驢馬は持つてません。只ただの仔馬ならあります。」

「只の仔馬は大きくて駄目だめだわ。」

「そんなら、あなたは小鳥は嫌きらひですか。」

「小鳥。わたし大好きよ。」

「あげませう。私はひはを有もつてゐます。ひはを一疋ひきあげませうか。」

「えゝ。欲しいわ。」

「あげませう。私今持つて来ます。」

「えゝ、早くよ。」

達二は、一生懸命、うちへ走りました。美しい緑色の野原や、

小さな流れを、一心に走りました。野原は何だかもくもくして、ゴムのやうでした。

達二のうちは、いつか野原のまん中に建つてゐます。急いで籠かごを開けて、小鳥を、そつとつかみました。そして引つ返さうとしましたら、

「達二、どこさ行く。」と達二のおつかさんが云ひました。

「すぐ来るから。」と云ひながら達二は鳥を見ましたら、鳥はいつか、萌黄色もえぎの生菓子に變つてゐました。やっぱり夢でした。

風が吹き、空が暗くて銀色です。

「伊佐戸いさどの町の電気工夫のむすこあ、ふら、ふら、ふら、ふら、ふら、」とどこかで云つてゐます。

それからしばらく空がミインミインと鳴りました。達二は又うとうとしました。

山男が櫓ならの木のうしろからまつ赤な顔を一寸ちよつと出しました。

（なに怖いことがあるもんか。）

「こりや、山男。出はつて来こ。切つてしまふぞ。」達二は脇差わきざしを抜いて身構へしました。

山男がすっかり怖がつて、草の上を四つん這ばひになつてやつて来ます。髪が風にさらさら鳴ります。

「どうか御免ごめごめ御免。何じよなことでも為さんす。」

「うん。そんだら許してやる。蟹かにを百足捕つて来こ。」

「ふう。蟹を百足。それ丈だけでようがすかな。」

「それがら兎うさぎを百足捕つて来こ。」

「ふう。殺して来てもようがすか。」

「うんにや。わがんだい。生きだのだ。」

「ふうふう。かしこまた。」

油断をしてゐるうちに、達二はいきなり山男に足を捉つかまれて倒されました。山男は達二を組み敷いて、刀を取り上げてしまひました。

「小僧。さあ、来こ。これから俺おれの家来だ。来う。この刀はいゝ刀だな。実に焼うなきをよぐかけである。」

「ばか。奴うなの家来になど、ならない。殺さば殺せ。」

「仲々づ太いやづだ。来こつたら来こう。」

「行がない。」

「ようし、そんだらさらって行く。」

山男は達二を小脇にかゝへました。達二は、素早く刀を取り返して、山男の横腹をズブリと刺しました。山男はばたばた跳ね廻って、白い泡を沢山吐いて、死んでしまひました。

急にまっ暗になつて、雷が烈しく鳴り出しました。

そして達二は又眼を開きました。

灰色の霧が速く速く飛んでゐます。そして、牛が、すぐ眼の前に、のっそりと立つてゐたのです。その眼は達二を怖れて、横の方を向いてゐました。達二は叫びました。

「あ、居だが。馬鹿だな。奴は。さ、歩べ。」

雷と風の音との中から、微かすかに兄さんの声が聞えました。

「おゝい。達二。居るが。達二。達二。」

達二はよろこんでとびあがりました。

「おゝい。居る、居る。兄あいなあ。おゝい。」

達二は、牛の手綱をその首から解いて、引きはじめました。

黒い路が又ひよつくり草の中にあらはれました。そして達二の兄さんが、とつぜん、眼の前に立ちました。達二はしがみ付きました。

「探さがしたぞ。こんな処どこまで来て。何なして黙もくって彼処あそこに居ないが

った。おぢいさん、うんと心配してるぞ。さ、早く歩あべ。」

「牛あ逃げだだも。」

「牛あ逃げだ。はあ、さうが。何にびつくりしたたがな。すつかりぬれだな。さあ、俺おらのけら着ろ。」

「一向寒くない。兄あいなのなは大きくて引き擦ずるがらわがんない。」
「さうが。よしよし。まづ歩あべ。おちいさん、火たいで待つてるがらな。」

緩い傾斜を、二つ程昇り降りしました。それから、黒い大きな路について、暫しばらく歩きました。

稲光が二度ばかり、かすかに白くひらめきました。草を焼くにほひ匂がして、霧の中を煙がほつと流れてゐます。

達二の兄さんが叫びました。

「おちいさん。居だ、居だ。達二あ居だ。」

おぢいさんは霧の中に立つてゐて、

「あゝさうが。心配した、心配した。あゝ好^えがった。おゝ達二。寒がべあ、さあ入れ。」と云ひました。

半分に焼けた大きな栗の木の根もとに、草で作った小さな囲ひがあつて、チヨロチヨロ赤い火が燃えてゐました。

兄さんは牛を櫓^{なら}の木につなぎました。

馬もひひんと鳴いてゐます。

「おゝむぞやな。な。何ぼが泣いだがな。さあさあ団子たべろ。食べろ。な。今こつちを焼ぐがらな。全体何処迄行つてだった。」

「笹^{ささ}長^{なが}根^ねの下^おり口だ。」と兄が答へました。

「危いがった。危いがった。向ふさ降りだらそれつ切りだったぞ。」

さあ達二。団子喰べろ。ふん。まるつきり馬こみだいに食つてる。さあさあ、こいづも食べろ。」

「おぢいさん。今のうちに草片附げで来るべが。」と達二の兄さんが云ひました。

「うんにや。も少し待で。又すぐ晴れる。おらも弁当食ふべ。あゝ心配した。俺も虎おらこ山とらの下まで行つて見で来た。はあ、まんつ好えがつた。雨も晴れる。」

「今朝ほんとに天氣好えがつたのにな。」

「うん。又好ゆくなるさ。あ、雨漏つて来た。草少し屋根さかぶせろ。」

兄さんが出て行きました。天井がガサガサガサガサ云ひます。

おぢいさんが、笑ひながらそれを見上げました。

兄さんが又はひつて来ました。

「おぢいさん。明るくなつた。雨あ霽^はれだ。」

「うんうん。さうが。さあ弁当食つてで草片附げべ。達二。弁当食べろ。」

霧がふつと切れました。陽の光がさつと流れて入りました。その太陽は、少し西の方に寄つてかかり、幾片かの蠟^{ろうふ}のやうな霧が、逃げおくれて仕方なしに光りました。

草からは雫^{しづく}がきらきら落ち、総^{すべ}ての葉も茎も花も、今年の終りの陽の光を吸つてゐます。

はるか^{あを}の北上の碧い野原は、今泣きやんだやうにまぶしく笑ひ、

向ふの栗の木は、青い後光を放ちました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第八卷」筑摩書房

1979（昭和54）年5月15日初版第1刷発行

1984（昭和59）年1月30日初版第7刷発行

入力：林 幸雄

校正：久保格

2002年11月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

種山ヶ原

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>